

ロンドン研究日記

はじめに

2023年4月20日から1年間、英国のUniversity College London(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン; 以下、UCL)で研究活動を行うため、長期出張に出ています。ここでは、その経緯と研究の様子をお伝えしたいと思います。

日本の研究者が研究資金を得る方法の一つが、独立行政法人日本学術振興会への研究費の申請です。文部科学省所管の学術振興会は、毎年公募を出し、研究資金の援助を行っています。ここで交付される研究助成金が「科研費」と呼ばれるものです。科研費には色々な種類がありますが、今回獲得したのは、採択された研究者が海外の大学などの研究機関で1年程度の期間に国際共同研究を行うためのものです。この申請が採択されたのは2018年度のことでした。採択後3年以内に渡航する決まりのため、2020年4月上旬に渡航を予定していましたが、新型コロナウイルスの流行により渡航中止となりました。非常事態に伴い研究期間の延長が認められ、渡航規制が緩和された今年度、ようやく実現することができました。滞在先のUCLは、私が学位を取得した大学であり、とても馴染みが深い場所でもあります(図1)。

University College London(UCL)はどんな大学?

University College LondonとUniversity of Londonの違いを問われることが度々あります。UCLは、University of London設立の大元になった大学です。UCLの設立後、ロンドン市内にキングズ・カレッジなど多数のカレッジが誕生しました。これ



図1. UCLのメインキャンパス。

らの総称がUniversity of Londonとなります。UCLもUniversity of Londonの中に含まれ、どちらもロンドン大学と訳されることが多いのですが、混乱を避けるため、ここではUCLと表記します。UCLの設立は1826年に遡ります。大学設立の際、その理念に大きな影響を与えたのが哲学者のジェレミー・ベンサムでした。当時は既に、オックスフォード大学とケンブリッジ大学があったものの、英国教徒の貴族男性のみ入学が許可されており、誰でも教育を受けられる場所ではありませんでした。ベンサムは「教育の機会は平等に与えられるべきである」と唱え、その理念に基づき人種・階級・宗教を問わず、誰でも教育を受けることができるUCL(当時はLondon University)が設立されました。しかし、当時の「教育の平等」とは男性に限られたことであり、女性の入学は許されていませんでした。1860年代になると女性の入学が許可され、1878年には英国で初めて女性の学位取得が認められるようになりました。

教育の平等は留学生も例外ではありません。江戸時代末期の1863年、長州藩主の密命を受けた5人の若者(井上馨、井上勝、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤博文)が英国を訪れ、人種・宗教の制限なく広く門戸を開いたUCLに聴講生として入学しました。さらに、1865年には、薩摩藩からも14名の若者がUCLに入学しています。その中の一人が、後に東京帝室博物館(現・東京国立博物館)の初代館長に就任した町田久成です。UCLの中庭には、彼らの名が刻まれた顕彰碑があります。

教育の平等化を実現した偉大なジェレミー・ベンサムに現在もお目にかかることができます。ベンサムの死後、遺言により遺体はUCLで医学研究のために解剖された後、ミイラのような状態で保存され、UCLの一角に鎮座することになりました。しかし、あまりに長いこと座り続けてきたため、頭部が落ちてしまい、ゴムマスクが被せられています(図2)。現在のUCLには、様々な人種・宗教の学生や職員が集まっています。その様子にベンサムも



図2. UCLのキャンパス内に飾られたジェレミー・ベンサム。

満足しているかもしれません。

大学施設と博物館

UCLはロンドンの中心部に位置するため、キャンパスはコンパクトにまとまっており、一部の施設は街中に分散しています。メインキャンパスは大英博物館の裏口から徒歩5分ほどの場所にあり、ここには講義室や研究室の他、図書館、学食、造形工房、シアター、ジムなどの施設が集まっています。博物館は3つあり、ピートリー博物館(考古)、グラント博物館(生物)、アート博物館(美術)がメインキャンパス内に点在しています。ここで特にご紹介したいのがグラント博物館です。

グラント博物館は1827年、ロバート・エドモンド・グラントによって教材用の標本を管理するために設立されました。グラントは、エディンバラ大学で教鞭をとっていた時代、若きチャールズ・ダーウィンに大きな影響を与えた師としても知られています。UCLへ移籍したグラントは、英国初の動物学及び比較解剖学の教授に着任しました。しかし、当時の大学に教材用の標本が一点もないことを知り、すぐに骨格・液浸・ワックス標本の収集を始めます。彼の死後、書籍や1万点の標本は博物館に寄贈され、現在の博物館コレクションの基盤となりました。ドードー、フクロオオカミなど世界的にも非常に珍しい標本も数多く収蔵されているグラント博物



図3. UCLのグラント博物館。改装中のため現在閉館中。

館は、1996年になると一般公開されるようになります。2011年には、通りを挟んだ向かい側の建物に博物館が移設され、展示室を拡大してリニューアルオープンしました(図3)。展示室内に学習スペースもあり、大学の授業、研究、一般の来館者など多くの人に利用されています。長い博物館の歴史の中で、分子生物学などの新しい学問の発展に伴い、古い自然史標本の利用価値が問われた時代もありました。しかし、どんなに科学が進歩しようとも自然史標本には普遍的価値があることが再認識され、グラントの標本は200年近く学内外の人々に活用されています。この先も多くの人が彼の集めた標本を手に取り、学び、新しい発見をしていくことでしょう。

UCLでの研究課題

現在、在籍しているのはUCLのメインキャンパス内のスーザン・エバンス教授の研究室です(図4)。世界的にも有名な両生爬虫類の研究者で、大学院生時代の指導教官の一人です。今回UCLとの共同研究では、絶滅したアルバノペトン類



図4. UCLのエバンス研究室。

という両生類を題材にしています。現生両生類の起源には多くの謎が残されていますが、アルバノペトン類は現生両生類の系統に近く、その進化の道筋を紐解く上でも重要なグループであると考えられています。しかし、化石記録が少なく、その生態は謎に包まれていました。ところが近年、スペイン、日本、ミャンマーから新たに発見された化石から、その興味深い特徴が徐々に明らかになってきました。獲物を捕らえる際に長く飛び出す舌や、爬虫類のように鱗に覆われた体は、陸上生活に適応していることを示しています。また、アルバノペトン類は首の関節が発達して、よく動くのに対して、現生両生類では首の動く方向が限られています。進化の過程で首の動きが制限されるようになったとすれば、そこに何か利点があったのでしょうか。この疑問に挑むため、絶滅したアルバノペトン類の生態を復元し、両生類の進化の一端を解き明かそうとしています。

ロンドン自然史博物館

研究には化石と現生の両生類を観察する必要があるため、ロンドン自然史博物館にも通っています。同じ研究室出身のマーク・ジョーンズ博士が同博物館のコレクション担当であるため、共同でデータ収集を行っています(図5)。

UCLでは国内外の研究者による研究発表を聞く機会に恵まれています。ロンドン自然史博物館でもセミナーが開催されているため、時々そちらにも参加させてもらっています。博物館の小規模セミナーはティールーム横の会議室に20人ほどの職員と学生が集まり、コーヒーとビスケットを片手に、気楽に議論するスタイルです。ティールームの壁には職員が近年発表した論文がびっしりと貼られており、活発な研究活動の様子を窺い知ることができます(図6)。

ロンドン自然史博物館は、図書館が充実し、CTなどの研究機材が整っている素晴らしい博物館です(図7)。しかし、欠点がないわけではありません。例えば、標本カタログが不完全であることが多々あります。液浸標本は瓶が古く、容易に標本を取り出せないものが多く、膨大な書類手続きを必要とするため、標本の貸し出し



図5. ロンドン自然史博物館の現生両生類のコレクション。ジョーンズ博士と標本を選出中。



図6. ロンドン自然史博物館の動物部門のティールーム。壁には職員の論文が張り出されている。



図7. ロンドン自然史博物館の現生魚類・両生爬虫類の図書室。他にも多くの図書室がある。

も容易ではなく、標本の利便性が低いのも問題です。各博物館の長所と短所を目の当たりにし、標本管理について考える機会が多々あります。この経験を自身の標本管理にどう活かすかも課題です。

おわりに

長期間、館を不在するにあたり、職員、ボランティアの皆さんなど、多くの方々に助けて頂き深く感謝しております。英国での貴重な日々を大切に過ごし、帰国後の仕事に活かしていきたいと思ひます。